

ジャニーズ集団主義と世界に一つだけの花

日本的雇用慣行のもとで多能工化するアイドル

花屋の店先に並んだ
いろんな花を見ていた
人それぞれ好みはあるけれど
どれもみんなきれいだね
この中で誰が一番だなんて
争うこともしないで
バケツの中誇らしげに
しゃんと胸を張っている
それなのに僕ら人間は
どうしてこうも比べたがる？
一人一人違うのにその中で
一番になりたがる？
そうさ僕らは世界に一つだけの花
一人一人違う種を持つ
その花を咲かせることだけに
一生懸命になればいい
(作詞・作曲・編曲 槇原敬之)

グループ化の効用

先日、ある劇場で元ピンクレディーのミーさん(末唯 mie)が私のちょうど斜め前の席に座っていた。私はものすごく興奮し、高校 1 年生の時、コンサートに行ったんですよ、と話しかけたかったのだが、シャイなものでできなかったのが残念である。ただ私の世代からすると、ピンクレディーは少し子供向けという感じがしたもので、事実、私が高校 1 年生でピンクレディーのコンサートに行くと、小学生が多く、かなり恥ずかしかったものだ。ピンクレディーは子供向けだが、キャンディーズは構わない、という雰囲気があり、石破前防衛相がカラオケでキャンディーズを熱唱という週刊誌の記事を見ると、(人気取りと言う気もするが)あんな話し方の政治家でも同世代なんだな、と思う。

さてトリオやデュオ、グループのファンの楽しみは個性の異なったメンバーの相互作用でそこに小さな社会を投影することにある。美空ひばり・江

利チエミ・雪村いづみからなる元祖三人娘はもと「ジャンケン娘」という映画の企画が元である。つまり映画である以上、同じタイプのアイドルではストーリーが作れない。そこで異なるキャラクター設定が必要となるのである。

経営者にとってのアイドル作り

このようなグループ化とその連続は、プロダクション経営者にとって、経営の安定化に寄与し、望ましいことなのと言うまでもない。アイドルグループと言え、現在隆盛なのはジャニーズ事務所である。ジャニーズ、フォーリーブスの昔から、営々としてジャニーズ事務所は一貫した戦略をとり、現在の地位を築いたと言える。

さらにまた不祥事防止などタレント管理にグループ化は得策であり、取り替えのきくアイドルを量産することで労務管理が円滑に進む。モーニング娘。などメンバー交代はニュース作りだけでなくタレント統制上も有用なのだろう。

バラエティ化とグループ化

さて現状ではアイドル・グループは単純なグループ化から、より複雑な方向へ変化していく過渡期にあるのではないかというのが本稿での筆者の見立てである。

そしてこの過渡期はテレビにおける歌番組優位からバラエティ番組への変化から派生している。実際、歌番組が少なくなって久しい。ベスト 30 歌謡曲やら紅白歌のトップテンやら、ザ・ベストテンやら、少し前は歌番組が盛んであったものだ。しかし近年では、ほとんど見られない。

その代わりにアイドルは、コントもやれば歌も歌う、そして料理も作るというさまざまなバラエティ番組が盛んである。この状況で一人ですべてをこなせない。そこでグループ化が求められたのだと言えよう。

ギター一本で歌の才能開花というルートが廃れたわけではないのだろうが、それはテレビのバラエティのスターを生むわけではない。

昨年亡くなった Sherwin Rosen はシカゴ大学の労働経済学の大家だが、スーパースターがなぜ生まれたかを分析した論文がある。Rosen によ

れば、大量に同時に視聴できる技術の発達がスーパースターを生んだと指摘している。

しかし Rosen が大観衆と言わば「量」的な側面を考察したならば、ここでバラエティ・タレント化という「質」的側面が SMAP などの隆盛をもたらしたのだろう。

日本的雇用慣行と賞取りレース辞退

筆者はよく知らなかったのだが、ジャニーズ事務所のタレントは互いに競うようなレコード大賞のような賞レースには参加しないようだ。そんなこといったって、近藤真彦の「愚か者」はレコード大賞じゃなかったっけ、と思うと、それは確かにそうであり、賞レース不参加は近年のことだ。

日本的雇用慣行にはさまざまなものがあるが、スターを作らないという傾向はあるように思う。さまざまなジョブ・ローテーションを通じて、特殊技能の独占化や、職場情報の独占を防ぐ。つまりかけがえのない人を作らず、誰でも取り替えのきく歯車にする人事政策である。

そういった観点からみると、賞レース不参加宣言はよく理解できる。もはや賞のいらぬ地位にまで、ジャニーズ事務所は高まったこともあるが、賞を取り、既存のスターを輝かせると言うより、ジャニーズ内での「人の和」を志向した労務管理上の側面が強いと言えよう。

多能工としての SMAP

さて SMAP に話を戻そう。

若くて格好のいいアイドル・グループをジャニーズ事務所はコンスタントに生産することに成功してきた。しかし SMAP ほどの成功はまれであり、SMAP はジャニーズの歴史のなかでも群を抜く「一つだけの花」のグループであるだろう。

これにはある種の僥倖が存在している。まずジャニーズ事務所に力が存在し、さまざまな反発があるのも事実だが、長期的な育成が可能であったことである。SMAP の CD は必ずしも大ヒット、大ヒットの連続ではない。さまざまな方向性を模索しながら、今の地位を築いたと言える。第二に歌番組からバラエティ番組への過渡期である。

そういった意味でジャニーズ事務所が志向して

いる、より若い世代への SMAP の継承の方向は未来永劫続くものではないだろう。「イノベーションのジレンマ」という現象があるが、同一方向へのイノベーションが進むほど、異なった方向から新しいスターが生まれるのではないだろうか。

脇田成